

## 大会長講演 原発を抱えた村の総合医として歩いて

日時 6月25日(土) 15:30~16:10  
演者 川原田 恒(東通地域医療センター長)  
座長 松岡 史彦(公益社団法人 地域医療振興協会 六ヶ所村医療センター 管理者)

概要 東通村は青森県の下北半島の北東端に位置し、面積約300km<sup>2</sup>、人口約6,000人の村である。東通村原発があり、東北電力と東京電力がそれぞれ2基ずつ計4基計画され、うち東北電力の1号機は1998年着工され2005年に営業運転開始したが、東日本大震災に伴う福島原発事故を受けて再稼働の審査中で、他3基はいまだ建設が未定である。

原発の交付金により1998年から包括ケアを担う保健医療福祉の複合施設が段階的に建設され2000年に東通村診療所が開設され地域医療振興協会が管理委託を受けている。

村から要請された運営マニュアルには被ばく医療の依頼はなく包括ケアと地域医療教育を2大柱として総合医として勤務していたが、2003年に突然、県から初期被ばく医療機関指定の打診があった。被ばく医療の経験も知識もなく、何より被ばく事故など恐怖でしかなかったため、運営マニュアルに被ばく医療がないことを盾に拒否をした。しかし「緊急被ばく医療のあり方について」という報告書の存在を知り、「命の視点を最重要視し、包括的かつ一元的な・・・」という提言で包括的という言葉に共感し、初期被ばく医療機関を受け入れることになった。

しかし、今日まで被ばく医療への馴染みはないものの、福島原発事故後は原発を抱えた村の当事者として向き合うこととなった。低頻度と言われる被ばく医療だが原発職員の健康維持も大切な被ばく医療と考え、日頃から馴染みの産業保健や予防接種で対応してきた。そのことがコロナ禍で生かされ、村の新型コロナ対策として原発職員などのコロナワクチンの職域接種を行政が主体となり医療機関、事業所の連携で行い、人流の多い原発などの大規模事業所からの感染発生を抑制できたと考えている。

また、総合医として村の運動不足などの健康課題に対して、地域基盤型プライマリケアの手法を通じてリレーマラソンを開催したり、高血圧症対策で青森県立保健大学の指導のもと、厚労省の大規模実証事業に参加し、行政、産業保健、商業施設などとの協働で減塩の環境整備を行っているところである。

## 【略歴】

- 1982年 自治医科大学卒業(青森県5期)
- 1982年 青森県立中央病院初期研修
- 1986年 六ヶ所村千歳平診療所
- 1988年 青森県立中央病院外科後期研修
- 1989年 市浦村診療所
- 1994年 国保百石町立病院
- 1999年 東通地域医療センター